

同じくて違う世界
湯ノ浦コウ



The same, different world
Yunoura Yui



1
50

詩集 同じくて違う世界

湯ノ浦ユウ

*onajikutechigaufekai
yunourayuu*

☒ 「ピアノと夜と」

ピアノの音で始まるこの世界

夜の匂いが鼻をかすめては繰り返す言葉の流れ星

今はまだ月曜日

明日は雨らしくて透き通る光を遮られそう

待ち遠しいよ、ウィークエンド

涙ぐましい星のかけらを集めては慰める

疲れきった私は気がつけば明日は日曜日

いつのまにかピアノの音で終わるこの世界

それじゃあ、バイバイ

☒ 「ソラシロ」

はずした

あと

せかい

しかい

ぬくもり

このささ

わたしらしさ

いつか

えいえんとか

まんなかのきもちとか

つたえられたらしいのにな

☒ 「水中からの風景画」

淡く

眩しく

煌めいて

水色の太陽に溶けたみたいな光

思わずときめく

☒ 「真ん中の気持ち」

正義でもないし

悪でもない

強さでもないし

弱さでもない

敵でもないし

味方でもない

自分の意見が正義でその他は悪なのかな？

そんなことないと思うんだ

自分と意見が違えば悪にして蹴落として

そんなこと繰り返し返してもあんまり楽しくならないよ

もっと色々な可能性とか感受性があると思うんだ



「かくれんぼ」

「もういいかい？」

「まだだよ」

「もういいかい？」

「まだだよ」

「もういいでしょう？」

「まだだよ」

「まだだねなの？」

「だよ」

「いつまでまてばいいの？」

「わたしがいいっていつまでよ」

「それっていつなの？」

「じゃあそろそろいいかな」

「もういいかい？」

「もういいよ」

☒ 「カナシミ」

私にとっては優しさも恐怖も同じ一つの世界での出来事なの。

本当は気づいているのよ。

傷つかないふりをしているだけなの。

ただ、繋がっていたいだけなの。

あなたは繋がっていたいの？

☒ 「勘違いと空回り」

私が悲しい時にこんなにも盛大に雨が降るものだから、
少しだけ嫌いになりそうになって、
最後まで嫌ってしまったことを今日になって後悔した。

本当は私、雨好きなんだけどなあ。

なんならいっそのこと台風まで含めて好きになれる、
気がしている。
でも気がしているだけだよね。

うん、そうなんだと思う。

部屋を出れば外界のひんやりとした空気に晒される。

今日もしとすと。

雨音が広がって遊んでいるみたい。

そんな風に聞こえた。

聞こえた気がした。
そんな気になった。
だけだった。

☒ 「雨降りノ森」

雨の匂いがする

煮え切らない思いを煽るようだった

安藤裕子の新譜を流したまま

窓もあけたまま

テレビもつけたまま

ただ何をするでもなく椅子に座ってそこから中の音を拾い集めている

焦って何かなくしそうな時は

何もしないことも大切だと自分を納得させる

納得することで

何かなくした気がした

☒ 「ドレミノウタ」

コタエはいらなくてもいいことにハヤクきづかないと。

ジブンってなんだとかジブンってダレだとかハヤクしらないと。

それだけわかっていればアトはダレかがどうにかしてくれる。

ダレか……。。

ダレはダレなの？

ボクのことかもしれない。

ダレはボクなの？

それともボクはダレなの？

ダレがボクなの？

ド
レ
?

「Re:サイクル」

人間は思い込むことが得意なの。

自分の考えを疑うことをしないの。

自分の自信を信用し過ぎるの。

自分が当たり前だと思いたいの。

自分が受け入れられていると思いたいの。

自分に自信がないと思いたいの。

力がないと思いたいの。

思い込めない人間だと思いつむの。

何もできない無力だと思いつむの。

☒ 「噛み合わない」

┌

何かが必要だ。

この状況

を開くするためには何かが必要なんだ。

何だ？

この状況って何だ。

何しようとしてたんだっけ？

なんか馬鹿みたいだ。

私は嘘っぽく笑った。笑った。

至極嘘っぽく。

ひんやりと夏が伝わる。

ウソ。

夏みたいだ。

儂げで、もう消えそう

「

ウソ。

だって冬だよ。普通に寒いけど。

嘘っぽい。

なんで夏なの？

『ごめん、やっぱり寒いや。』

がいけないんだ。

天気が悪いの

何かすごい曇ってるし。

でも、テレビ

から流れてくる音で、

何か笑えてきた

「あはははははははは、全然噛み合わないやっ！」

☒ 「廻って、巡って、続く、続く」

もっと君はこの世界を楽しめればよかったのにね。

笑えばよかったのにね。

自分を出せばよかったのにね。

訴えかけることができたならよかったのにね。

でも君を残して世界は廻り続けただろう？

気づけることもあったと思うんだ。

君の知らない世界がどこかにあったかもしれないんだ。

それじゃあ、また、どこかでね。

次の世界でも会えたらいいね。

☒ 「殺伐」

大学一年生の時に初めてエヴァンゲリオンを見た。

なんだか心が締め付けられてから、何かを壊したくなった。

綾波よりもアスカが好きだった。

庵野秀明監督の分からせない感じ。

でも庵野さんの中に確実にエヴァがあって、

それは結局分らないままでもいいんだろうなって思った。

みんなの中に沢山のエヴァがあって、

庵野さんの中にも一つの答えがあって、

それでいいじゃないかと思った。

人の肌に触れる感覚がエヴァにはある気がした。

勝手にそう思っている。

大して詳しくもないけど、心のどっかにエヴァがある。
ずっとある。

衝撃とか衝動とか、

言葉にしたら陳腐なのかもしれないけど、

伝わり、繋がり、

たしかに何か受け取ったんだ。

「少女衝動」

電車からの風景を眺めながら、
僕は絶望を繰り返していたのかもしれない。

訳も分からずに絶望しては、
意味の分からない希望に縋っている。

ガタン、ゴトン、と音が刻まれ、体が揺れる。

ロックに救いがあるのかとかよく分からないけど、

この曲は聴いてると気分が良い。

かっちょいい。

すごくかっちょいい。

聴いてるだけで体が揺れる。

ヘッドフォンから聴こえてくる曲は、

☒ 「あの町のあの娘」

夢うつつな夏が過ぎ去っては、

憂鬱に支配されていく自分の感情が嫌になる。

街並みがいつもと違って見えるのは、

彼女の憂鬱に染め上げられているからだ。

帰り道の電車の中でついつい僕は夢うつつ——。

ぼやける視界に写るのはやはり彼女の憂鬱か。

それとも夏が終わって、

町が彼女の季節に彩られていくのかな。

☒ 「カウントダウン」

世界はワン、ツー、スリーのリズムで、

始まり、

終わり、

繰り返す。

☒ 「クリスマス」

赤、青、黄色の点滅がキラキラ光って

思わず吸い込まれそうになる

現実を忘れそうになる

日々をくだらなく思ってしまう

でも無駄な日々かもしれない時間も辛かった経験も

そんな時間があるからこそこの点滅がこんなに綺麗に見えるんだよね
だから私は日々が愛おしいと思うんだ

☒ 「十二月二十六日」

魔法の二日間もこれでお終い

☒ 「決まりごと」

本当は何も知らない。

本当は誰も知らない。

確かなことなんてない。

言葉でも言い表せない。

見当たらない。

不確かで不透明。

でも私達はそんな何かに縋りたくて、依存したくて、安心したくて、

ひとまずそれを「愛」と呼ぶことにした——。

こんな不確かな思いに名前なんかつけて私達は生きることにしたんだ。

☒ 「キラキラ、ピカピカ」

絶望すること。

絶望することがいかに大切なことか。

自分をもっとよく知らなきゃ。

知ろうとしなきゃ。

曖昧な愚かさは丸めて捨てる。

そして自分に行き着く。

漂流。

可能性の発見？

いや、やっぱり

漂流。

そして泳げるようになる。

飛べるようになる。

魔法だって使えるかもしれない。

やがて、ひらめく。

☒ 「すぐ、そこに」

あたしたちは不確かで不透明なものを、
愛とか希望とか夢って呼んでいるけど、
それは気休めでもないし、良いように解釈した訳でもない。
この世界には間違いなくそんな不確かで不透明なものが沢山詰まってる。
見えないなら見つける意志がないだけなんじゃないのかな？
幸せなんてどこにだってあるんだもの

☒ 「誰も知らない」

好きとか嫌いとか

面白いとかつまらないとか

良いとか悪いとか

そんな言葉の裏にはどんな言葉が潜んでるのかを

もっと具体的に知りたくて

小説書いたり作品の感想書いたりし始めたんだと思う

多分まだ自分が感じてることを全然表しきれてないと思うんだ

まだ自分で満足できるにも至ってない

☒ 「違うんだ」

『あなたってずるいわね』

「そんなことないよ」

『私にどうしてほしいわけ？』

「……」

『私はどうすればいいの？』

「君は僕にどうしてほしいわけ？」

『教えてほしいだけよ』

「わからないから教えられないよ」

『そっか』

「諦めないでよ」

『何それ』

「何でもない」

『やっぱりずるいわね』

「勝手に決めないでよ」

☒ 「好きになるって」

別に斬新だから面白いってわけでもないし

ベタだから面白くないわけでもないし

人気があるから好きになるわけでもないし

ファンが多いからって天の邪鬼的に否定するのは違うと思うし

自分の意見が全てじゃないし

知識があるからすごいわけでもない

楽しみ方は沢山あるんだよなあ

☒ 「足りないパズル」

君は真っ直ぐアタシのこと受け止められるの？

ぐにゃぐにゃじやダメよ

あなたがねじ曲げちやダメよ

現実もそのまま受け止めてね

あなたの解釈じやダメよ

☒ 「浮かび上がる」

ぶかぶか、ぶかぶか

ぶかぶか、ぶかぶか♪

空を見上げるように水面に浮かんでいる

私はそれを眺めている

虚構

空虚

ぶかぶか、ぶかぶか

ぶかぶか、ぶかぶか#

水にゆったりと浮かぶ音が聞こえる

私は湖の畔に浮かぶ母親の死体を後目に

誰も知らない処に行こうと思ひ

ちよつとだけ遠い処に旅にでることにした



「どこでもドア」

しは

わた

ここに

いる

ん

だ

よ

って

いっ
つだ



「キリトリ線」

空 虚

相 对 性

水 と 油 み た い う

同 じ く て 違 っ て

嘘 じ ゃ な く な

界

が

現

実



嘘 っ ぽ い

二 つ の 世

相 反 す る 考 え

憎 悪 と 愛

繋 ぎ 合 わ せ る

☒ 「核心のリズム」

目の前の扉をノックする

反応はない

「いい加減出てこないと退学くらっちゃうぞ」

まとも返事は聞こえてこない

別に俺には関係ないし

罪悪感も残るわけじゃないし

ましてやクラス委員だからといって俺を選んだ担任を恨んで欲しい

扉の向こうはきっと真っ暗だ

同じなのに扉一枚でこんなに違う

☒ 「追いかけて」

ねえ？

どこに行くの？

そっちじゃないよ

私が教えてあげる

こっちにおいで



「年越し」

もう
う で
今年のやり残しは
短かっただり
わ る
な ん か

た け ど
年の終わりは

ありませんか？
そ わ
来 年 も

年 だ と
良 い な あ

長 い よ

今 年 も 終

色 々 あ っ

妙 に そ わ

面 白 い 一

☒ 「夢げ」

微かで陰って

呼吸さえも途切れた

眠れない夜が続いて

強く孤独を感じる

手から滑り落ちるように

「幸せ」の断片さえも確認することはできない

叫びになりそうな声を殺しては

自分が生きていることを実感する

自分が何をしたいかはよく分かっている
生を実感する度に叶わないことを虚しく思う



「発言権」

私たちは何でも言っていればいいわけじゃないの

顔が見えていても見えていなくても一緒よ



「夜のカタチ」

夜は優しく見える時もある。

影ばっかりで怖く見える時もある。

沈んでいるようにも見える。

でも、強く、格好良くも見える

☒ 「滲む」

いい加減に自分の常識が、
他の人の当たり前と同じでないことに、
気づかなくちゃいけない。

もし、

「気づいてるよ」なんて、
当たり前前そんな顔をして言うなら、
それこそ嘘っぼい。

そんなに自信満々なんだって、
思われてしまいうさだ。



「明日になる前に」

夜に呑み込まれそうで

少し寂しくなる

今日の忘れ物はないだろうか

「時間」

『永遠のような別れだけは巻き戻しがきかない』

☒ 「冬 大晦日」

冬の匂いが濃くなってきて、

空気も乾いていて、

無機質な感覚が研ぎ澄まされていくようだった。

今年ももう終わる。

今年も色々なものに出会えた。

一年終わってみれば、

なんだかんだ楽しかったなあ、とか、

毎年こんなことを思っている気がする。

ずっと同じことを繰り返している気がする。

そんなこともないのか……。

ないのかなあ？

自分ではよくわかんないや。

でも多分楽しかったんだ。

あたりまえに過ごせる時間が、
楽しかったんだ。

きつとね、

もうすぐ今年も終わるみたいだよ

☒ 「見られたくない頭の中」

ゴミ箱に落書きしたメモを丸めて捨てる

スリーポイントの様な弧を描いて視界から消えていった

僕は恐ろしく愚かな妄想を書いたくだらないメモの内容を

思い出しては頭の中から消そうとするが

内心良い出来だったと思ってしまう

そんな自意識を飼い慣らす自信がなくなってきたところだった

☒ 「世界はリピート、一曲は四分間」

ヘッドホンをして耳を塞げば音楽は私を助けてくれる。

世界を遮ってくれる。

でも音楽はいつか終わっちゃうんだ。

世界はまた、

ワン、ツー、スリーのリズムで始まっちゃうんだ。



こ
れ
で

、

お
終
い

。

初めまして湯ノ浦ユウといえます。

いかがだったでしょう。初めての詩集ということでは色々実験的なこともさせて頂きました。

昨年の暮れぐらいからブログの方で散文詩なる企画をやり始めて二カ月程が経ちましたが作品も多く作ることが出来ました。

それもあってブログ以外でもっと皆さんの身近なものとして発表したいな、と思ひまして赤身レコーズさんの方から電子書籍として配信させて頂きました。

配信にあたってブログで掲載しているものから加筆、再編集をかけています。時間がありましたら読み比べてみるのも面白いかと思ひます。

これからも随時ブログの方でも散文詩を更新していくので興味があったらのぞいてみてください。

そして今回も表紙絵を担当してくださった Bisco さん本当に素敵な表紙がありがとうございました。Bisco さんの可愛らしい絵のおかげでこの作品もかなりやりたいことがやれて満足しています。ありがとうございました。

そして今年は本格的に小説の方にも力を入れて頑張っていけますのでよろしく願います。ゆっくりではありますが長編小説を進行中です。

今回は詩集という形でここまで読んでくださっていかがだったでしょう。理解できないものがあつたり、ドキッとするものがあつたり、優しい気持ちになれたり、怖さを感じたり、フワツとしたり、色んな事が巡ってしてくれたら嬉しいです。

本当にありがとうございました。

それでは。

The same, different world
Yumura Yui



1
2011